

謝罪慣用表現と謝罪心理 一日・英対照研究一

大谷麻美 (専修大学非常勤講師)

1. はじめに

ある発話行為について、異なる言語間において対照研究を行う際にしばしば問題となるのは、その発話行為を表す言語形式そのものと、その言語形式が談話のなかで実際に果たす機能が、言語間で必ずしも一対一対応しない点である。謝罪の慣用表現もその一例であり、日本語と英語の謝罪慣用表現が、謝罪について話し手の同じ心理を現しているという保証はない。例えば、日本人が謝罪慣用表現を多用することが、他言語の話者からは不誠実に思われたり、また、他言語では感謝表現が使用される場面において、日本語では「すみません」のような謝罪表現が使用されたりすることも、この問題と関わっている。さらに、謝罪慣用表現の使用・不使用をめぐる異なる言語・文化間で摩擦が生じるのも、この点が十分認識されていないことに一因がある。これらの問題を解決するには、謝罪慣用表現をその言語文化の価値観の反映としてとらえる社会言語学的観点からの分析が必要となる。本稿は、話し手の心理や場面認識の言語文化間での差に着目し、その分析を通して英語と日本語の謝罪慣用表現の特徴を明らかにしようとするものである。

2. 先行研究と問題点

謝罪慣用表現についてはすでに様々な側面からの分析がなされている。山梨(1986)は Austin(1962)、Searle(1969)らの研究を受け、発話行為としての謝罪の適切性条件を抽出した。しかし、この適切性条件とはあくまでも謝罪という発話行為の遂行の前提となる条件であり、実際に談話の中で謝罪がどのように使用されているかという言語文化間の差異にまでは言及するものではない。日・英語間の対照分析としては、中田(1989)、Kumagai(1993)がある。これらは両言語の謝罪談話を対照しているものの、謝罪対象、謝罪の話し手、謝罪の相手、談話構成等の相違に焦点を置き、謝罪の慣用表現そのものの相違には踏み込んでいない。両言語間の話し手の心理に着目したものとしては Coulmas(1981)、三宅(1994)がある。前者は日本語で謝罪と感謝が同じ「すみません」で表現されることに注目し、日本人はどちらの場面においても indebtedness(借り、負い目)を意識しやすいことを指摘している。後者も Coulmas の論を受け、日本人とイギリス人の謝罪表現とその場面における話し手の心理を調べている。この調査では、日本人・英国人が謝罪表現が使用される場面において「詫びの気持ち」「感謝の気持ち」「どちらでもない挨拶として何か表したい気持ち」のどの気持ちを持つのかに注目し、その結果、日本人とイギリス人は同じ場面に遭遇しても必ずしも同じ気持ちを持たないこと、日本人が「詫びの気持ち」を持ちやすいことを指摘している。しかし、三宅の研究の問題点は、「詫びの気持ち」とはいったい何なのか、話し手のどのような状況判断や心理から「詫びの気持ち」が起るのかが明らかにされていない点である。

3. 本研究の目的

本稿は、以上のような「詫びの気持ち」がどのような心理のプロセスから生じるものであるかを検討することが謝罪慣用表現の文化差を見る上で重要な点と考え、詳細な心理項目を設定し、話し手の心理面から両言語の謝罪慣用表現を考えようとする。すなわち、謝罪慣用表現が使用される場面で、話し手がその状況をどのように判断し、どのような心理的反応を示すのかを明らかにしようとするものである。具体的には以下の3点である。

- ・ 同一場面において英語と日本語とでは謝罪慣用表現の使用に差があるのか。
- ・ 同一場面において両言語の話者間で状況判断や心理的反応に差があるのか。
- ・ その話し手の状況判断や心理的反応が謝罪慣用表現の使用にどのように影響しているのか。

4. 謝罪と謝罪慣用表現

本稿では、謝罪を話し手の心的態度の表出と考える山梨(1986)の発話行為の適切性条件に則って検討を加える。適切性条件とは発話行為を特徴づける条件で、山梨は謝罪の適切性条件を以下のように規定した。

- i 命題条件 その発話に内包される命題内容は話し手による過去の行為。
- ii 準備条件 話し手は自分の行為が聞き手にマイナスであると信じている。
- iii 誠実条件 話し手は自分の行為を悔いている。
- iv 本質条件 話し手の自分の行為に対するその気持ちの表出。

このような条件に則った謝罪の発話行為として最も頻繁に使用されるのが、慣用化、定型化された謝罪表現である[例：I'm sorry. Excuse me. I apologize. It's my fault. すみません。ごめんなさい。失礼。申し訳ない。等]。また、慣用化していないが上記の適切性条件を満たそうとする表現[例：Perhaps I shouldn't have done it.(Trosborg 1987) お待たせしてしまいました。等]も謝罪表現とみなされる。しかし、異言語文化間での解釈で特に問題となりやすいのは、いわゆる慣用化された謝罪表現である。これら慣用表現はあまりに慣用化されているがゆえに、その表現に本来こめられた意味が話し手に意識されずに使用される場合がみられ、また一方、その使用適応範囲も言語文化によって異なっているためである。そこで本稿では、特に謝罪慣用表現に焦点を当て、慣用表現とその背後にある話し手の心理的反応との関係について考える。

5. 調査項目および調査手順

謝罪慣用表現が使用される場面は非常に多様であるが、本稿では日本語に特徴的な感謝や挨拶等の場面での謝罪表現の使用はひとまず研究対象からはずし、聞き手に何らかの実質的不都合が生じる場面に限定する。そうすることにより、謝罪表現のより本来的な使用方法の部分における日・英語での差異を見ることができると思われるからである。場面設定の変数としては、謝罪に大きく影響し、かつ文化間で判断に差が認められると予想される、聞き手の負担の大小、話し手の責任の有無、話し手に対する聞き手の地位を考慮し、以下の8場面を設定した。(表1)

場面	負担	責任	地位	具体的場面
1	大	有	上	話し手の不注意で上司にけがをさせてしまう
2	大	有	同	話し手の不注意で同僚にけがをさせてしまう
3	大	無	上	PCの不調で困惑する上司に助けを依頼されるが、複雑すぎてわからないことを申し出る
4	大	無	同	PCの不調で困惑する同僚に助けを依頼されるが、複雑すぎてわからないことを申し出る
5	小	有	上	話し手の不注意で廊下で上司の肩にぶつかってしまう
6	小	有	同	話し手の不注意で廊下で同僚の肩にぶつかってしまう
7	小	無	上	PCの操作を終業後に教えてほしいと上司より依頼されるが、先約のため断る
8	小	無	同	PCの操作を終業後に教えてほしいと同僚より依頼されるが、先約のため断る

表 1 各場面の変数と具体的場面設定

調査の内容は、まず上記の場面を想定した談話完成テスト（以下 DCT）を行い、各場面で自分が言うと思われる発話を被調査者に記入させた。さらにその後、同じ場面を提示し、被調査者が各場面でどのような状況判断をし、心理的反応を示すかについて 5 段階尺度で判断させた(Appendix 参照)。調査した心理項目は、謝罪の要因になると考えられる「聞き手に対する迷惑さ」「話し手の責任」「話し手の後悔」「聞き手に対する負い目」「聞き手に対する気の毒さ」の 5 項目である^{注1}。

被調査者は英語を母語とするアメリカ人^{注2}と日本語を母語とする日本人で、共に外国生活経験がなく社会人^{注3}であることを条件とした。日本人は 52 名（男 27 名、女 25 名、平均年齢 36.58 才）で関西と関東で調査を行った。また、アメリカ人は 46 名（男 21 名、女 25 名、平均年齢 43.63 才）でミシガン州、アリゾナ州、ヴァージニア州、ハワイ州で行った。しかし実際に被調査者が最も長く暮らした県、州は両国とも全土に広く分布していた。調査は質問紙^{注4}を直接配布回収する方法と、e メールを利用して配布回収したものがある。調査は 2001 年 8 月から 11 月にかけて実施した。

6. 分析結果と考察

6. 1 謝罪慣用表現の使用の様態

まず、上記の DCT で使用された謝罪慣用表現とその使用頻度は表 2 の通りであった。それぞれの謝罪表現はその応用形（例：“Sorry” “I’m sorry” “I’m so sorry”等。また、「ごめんなさい」「ごめん」「ごめんね」等）をまとめて一種類として数えた。また、一場面中で複数の謝罪慣用表現が使用されている場合（例：「すいません。大丈夫だった？ほんとにごめんね。」等）は、それぞれを数えた。

その結果、日本語では比較的多様な謝罪表現が場面や相手により使い分けられているの

に対し、英語では使用される謝罪慣用表現の種類がきわめて限られており、場面や相手による使い分けは余り見られなかった。また、被調査者一人あたりの8場面中での謝罪慣用表現の平均使用回数を見る

と英語は、1人5.98回であるのに対し、日本語では8.38回とその使用回数にも差が見られた。

次に、上記の8場面のそれぞれにおいて、英語および日本語で謝罪慣用表現が使用されるか否かを見た。分析方法は、それぞれの場面で謝罪慣用表現を使用した人数と使用しなかった人数を、フィッシャーの直接確率計算法で検定し、両言語間

英語 (n=46)		日本語 (n=52)	
謝罪表現	使用頻度 (回)	謝罪表現	使用頻度 (回)
Sorry	236	ごめん	195
Excuse me	37	すみません	143
My bad	2	申し訳ない	76
計	275	悪い	10
1人平均	5.98	失礼	8
		許して	3
		堪忍して	1
		計	436
		1人平均	8.38

表 2 DCT で使用された謝罪慣用表現とその頻度

でその使用人数の差が有意であるかどうかを見た。検定結果は以下の表3の通りであった。その結果、4つの場面(場面1、3、7、8)において日・英語間で謝罪慣用表現の使用人数に有意差が見られた。このことより、まず、アメリカ人と日本人は同じ場面に遭遇しても、

必ずしも同じ様に謝罪慣用表現を使用するわけではないことが明らかである。又、有意差の認められた4場面の全てにおいて、アメリカ人に比べ日本人が謝罪慣用表現をより使用したための有意差であることも読み取れる。

日本人が謝罪慣用表現を多用することはすでに先行研究で指摘されてきたが、その指摘の多くは、感謝場面や挨拶場面のような日本語に特徴的な謝罪慣用表現の使用を考慮に含めたものであった。しかし、今回の調査より、これらの日本語特有の謝罪表現の使用場面を排除し、聞き手に何らかの不都合が明らか

場面	アメリカ人 (n = 46)		日本人 (n = 52)		正確有意 確率
	謝罪あり (人)	謝罪なし (人)	謝罪あり (人)	謝罪なし (人)	
1	39	7	52	0	.004*
2	44	2	52	0	.218
3	14	30	38	14	.000*
4	11	35	18	34	.275
5	45	1	52	0	.469
6	43	3	52	0	.100
7	31	15	47	5	.006*
8	30	16	47	5	.003*

表 3 謝罪慣用表現の使用人数と検定結果 *p<0.05

に生じる、いわば両言語ともに謝罪慣用表現が特に不可欠と考えられる場面に限っても、尚この傾向が認められることが明らかになった。

6. 2 状況判断と謝罪心理の様態

次に、話し手の状況判断とその心理に両言語間で差異が認められるか否かを見るため、各場面ごとに5段階心理尺度の評定の平均をとりt検定にかけた。場面ごとの5段階尺度の平均と検定結果をまとめたものが表4である。全体を通して言えることは、日本人はアメリカ人に比べて、多くの場面で聞き手に対する「迷惑」を有意な差で高く見積もっているということである。(8場面中6場面、場面1、2、4、5、6、8)。また、その「迷惑」度が高いと評価した6場面中5場面(場面1、2、4、5、8)では、やはりアメリカ人に比べ有意な差で聞き手に対する「負い目」を感じていることが明らかになった。このことから、日本人は全体的に聞き手への「迷惑」と聞き手への「負い目」をアメリカ人より高く評価する傾向があると考えられる。この結果はCoulmas(1981)の、日本人がindebtedness(借り、負い目)を感じやすいと言う論を支持するものとなった。しかし、その日本人のindebtednessの背後には、アメリカ人以上に聞き手に対する「迷惑」への強い意識が存在することが本調査で明らかになった。

しかし、聞き手に対しての「責任」に関してはどちらかの言語に一傾向的な有意差は見られず、各場面で、言語により「責任」の認識が異なることがわかる。例えば、廊下で同僚にぶつかる場面6では、アメリカ人は日本人に比べ有意な差で話し手の「責任」を感じる。一方、上司や同僚から助けを依頼されて断る場面3、4では、アメリカ人は「責任」を余り感じないのに対し(場面3…2.24、場面4…1.83)、日本人は有意な差でアメリカ人以上に「責任」を感じている(場面3…3.02、場面4…2.90)。このように、話し手の「責任」に対する判断は英語、日本語のいずれかの言語だけがより感じやすいのではなく、むしろ二つの言語文化間で場面ごとに感じ方がかなり異なることがうかがえる。

又、聞き手に対しての「気の毒さ」の評価も言語間でかなりの差異が認められることが予想されたが、今回の8場面の限りでは日・米間で有意な差は見られなかった。

謝罪が話し手の心的態度を表明する発話行為である限り、このような各場面での状況判断や心理的反応に関する言語・文化間での差異が謝罪慣用表現の使用、不使用に何らかの影響を与えていることが予想される。

場面	迷惑		責任		後悔		負い目		気の毒さ	
	日	米	日	米	日	米	日	米	日	米
1	4.75	3.33	4.69	4.37	4.71	4.46	4.38	3.67	4.50	4.48
	(.000)*		(.053)		(.138)		(.003)*		(.896)	
2	4.63	2.49	4.67	4.39	4.46	4.43	3.81	3.26	4.21	4.37
	(.000)*		(.058)		(.888)		(.026)*		(.420)	
3	2.42	2.15	3.02	2.24	3.31	2.37	2.67	2.33	3.86	3.50
	(.254)		(.002)*		(.001)*		(.176)		(.121)	
4	2.31	1.83	2.90	1.83	3.15	2.22	2.41	1.65	3.71	3.41
	(.034)*		(.000)*		(.001)*		(.001)*		(.225)	
5	4.00	3.00	3.63	4.04	3.90	3.58	3.23	2.76	3.37	3.11
	(.000)*		(.053)		(.150)		(.039)*		(.287)	
6	3.71	2.59	3.27	3.74	3.43	3.24	2.83	2.46	3.00	2.89
	(.000)*		(.026)*		(.412)		(.131)		(.657)	
7	3.13	2.72	3.04	2.70	3.37	3.04	2.96	2.65	3.69	3.28
	(.095)		(.214)		(.224)		(.240)		(.088)	
8	3.12	2.64	2.87	2.30	3.21	2.61	2.77	2.15	3.63	3.22
	(.049)*		(.024)*		(.016)*		(.020)*		(.085)	

表4 話し手の心理尺度の平均とそのt検定結果

()内は有意確立 * p < 0.05

6. 3 謝罪慣用表現の使用と謝罪心理の関連性

以上の分析より、英語と日本語では同じ場面に遭遇しても、謝罪慣用表現の使用の有無や、各場面での状況判断、感じ方に差異が認められることがわかった。しかし、これだけでは話し手の心理と謝罪慣用表現の使用とにどのような関連があるのかは明らかではない。そこで、謝罪慣用表現が使用される場面で、両言語ではどのような心理状態が強く意識されているのかを確かめる必要がある。

まず DCT の 8 場面を、ほとんどの被調査者によって謝罪慣用表現が使用される場面、どちらかという使用される傾向がある場面、どちらかという使用されない傾向がある場面、ほとんど使用されない場面（本調査では該当場面なし）と大きく 4 つに分類した。80%以上の人々が謝罪慣用表現を使用した場面を「謝罪使用場面」（英語：場面 1、2、5、6、日本語：場面 1、2、5、6、7、8）、79-50%の人々が謝罪慣用表現を使用する場面を「謝罪使用傾向場面」（英語：場面 7、8、日本語：場面 3）、49-20%の人にしか謝罪表現が使用されない場面を「謝罪不使用傾向場面」（英語：場面 3、4、日本語：場面 4）、19%以下を「謝罪不使用場面」（本調査では該当場面なし）とした。そして各場面の話し手の心理尺度の平均をとると表 5、6 のようになる。

「謝罪使用場面」で強く意識され、かつ「謝罪使用傾向場面」や「謝罪不使用傾向場面」で余り意識されない心理的項目があるとすれば、それが謝罪慣用表現の使用の大きな誘因となる心理項目と言える。

英語の場合、謝罪慣用表現が使用される場面では、話し手の「責任」が強く意識されている。「謝罪使用場面」では「責任」が平均で 4.13 ポイントと他の心理項目と比較して最も強く意識されている。しかし、「謝罪使用傾向場面」、「謝罪不使用傾向場面」では 2.50、2.03 と他の心理項目と比較して最も大きな 1.6 ポイント以上の開きでその尺度は下がっている。また、「後悔」も、「謝罪使用場面」では平均で 3.92 であったものが「謝罪使用傾向場面」、「謝罪不使用傾向場面」では 2.82、2.29 と 1 ポイント以上の差で意識されなくなっている。この点より、英語で謝罪慣用表現を使用する際、話し手はこの 5 つの心理項目の中でも話し手の「責任」と「後悔」をとりわけ強く意識していると考えられる。

一方、日本語の場合、「謝罪使用場面」で高く見積もられ、かつ「謝罪使用傾向場面」「不使用傾向場面」とで大きく差が見られる心理項目は聞き手に対する「迷惑」である。「謝罪使用場面」で「迷惑」の平均は 3.89 で他のどの項目よりも強く意識されているが、「謝罪使用傾向場面」、「謝罪不使用傾向場面」では 2.42、2.31 とその意識度 1.4 ポイント以上という大差で下がっており、他の心理項目では、「謝罪使用場面」とそれ以外の場面とでこれほどの意識の差を見ることはない。このことより、日本語では、謝罪慣用表現が使用される場面では、話し手は聞き手に対する「迷惑」を強く意識しており、聞き手への「迷惑」が強く意識されなくなると謝罪慣用表現の使用頻度は減るといえる。

以上のことから、英語では話し手の「責任」と「後悔」が、日本語では聞き手に対する「迷惑」が話し手に謝罪慣用表現を使用させる大きな心理的要因となっていることがわかる。逆に、両言語で同じように謝罪慣用表現が使用されても、その背後にある話し手の心理の焦点は必ずしも同じだとは言えないことが明らかである。

	場面	迷惑	責任	後悔	負い目	気の毒さ
謝罪使用場面	1	3.33	4.37	4.46	3.67	4.48
	2	2.49	4.39	4.43	3.26	4.37
	5	3.00	4.04	3.58	2.76	3.11
	6	2.59	3.74	3.24	2.46	2.89
	平均	2.85	4.13	3.92	3.03	3.71
謝罪使用傾向場面	7	2.72	2.70	3.04	2.65	3.28
	8	2.64	2.30	2.61	2.15	3.22
	平均	2.68	2.50	2.82	2.40	3.25
謝罪不使用傾向場面	3	2.15	2.24	2.37	2.33	3.50
	4	1.83	1.83	2.22	1.65	3.41
	平均	1.99	2.03	2.29	1.99	3.45

表 5 英語における各場面での心理尺度とその平均

	場面	迷惑	責任	後悔	負い目	気の毒さ
謝罪使用場面	1	4.75	4.69	4.71	4.38	4.50
	2	4.63	4.67	4.46	3.81	4.21
	5	4.00	3.63	3.90	3.23	3.37
	6	3.71	3.27	3.43	2.83	3.00
	7	3.13	3.04	3.37	2.96	3.69
	8	3.12	2.87	3.21	2.77	3.63
	平均	3.89	3.69	3.84	3.33	3.73
謝罪使用傾向場面	3	2.42	3.02	3.31	2.67	3.86
謝罪不使用傾向場面	4	2.31	2.90	3.15	2.41	3.71

表 6 日本語における各場面での心理尺度とその平均

6. 4 考察

6.1で明らかになったように、アメリカ人と日本人を比較すると、感謝や挨拶場面等での謝罪慣用表現の使用を考察から省き、聞き手に何らかの負担を強いる際の、謝罪の本来的な使用場面に限っても尚日本人の謝罪慣用表現の使用頻度は高い。その理由を以上の分析から次のようにまとめることができる。6.2の分析より明らかなように、同じ状況に接しても日本語では英語以上に聞き手の「迷惑」を高く見積もる傾向がある。さらに、英語では話し手の「責任」が謝罪慣用表現を誘発する最も大きな心理的要因であるのに対し、日本語ではその高く見積もられた聞き手の「迷惑」が謝罪慣用表現を誘発する一番の心理的要因である。この英語における以上に高く見積もられた聞き手の「迷惑」度が、日本語

で英語以上に謝罪が多用される要因と考えることができる。

さらに、これら心理的要因以外の要因について触れたい。場面 3 (対上司)、場面 4 (対同僚) での謝罪慣用表現の使用を見ると、英語では両場面間で謝罪の使用頻度に大差は見られない。(謝罪慣用表現使用人数：場面 3…14 人、場面 4…11 人) しかし、日本語では相手が上司か同僚かの変数が謝罪慣用表現の使用に大きく影響している(同：場面 3…38 人、場面 4…18 人)。そこで、この際の心理的要因を見ると、日本語での「迷惑」度の認識は場面 3 が 2.24、場面 4 が 2.31 で大差はない。とすれば、心理的要因以外の聞き手の地位という対人的要因が場面 3、4 の謝罪の使用に影響を与えたと考えられる。英語ではこのような対人的要因によって謝罪慣用表現の使用に差が見られることは 8 場面中には見られなかった。

以上の調査より、英語と日本語の謝罪慣用表現の使用を誘発する要因を次のようにまとめることができる。

<謝罪慣用表現の誘発要因>

英語… 心理的要因【話し手の責任】【話し手の後悔】

日本語… 心理的要因【聞き手の迷惑】 + 対人的要因【聞き手の地位】

話し手はこれらの要因を鑑みて謝罪慣用表現の使用、不使用を決定していると考えられる。逆に考えると英語と日本語とでは、同じように謝罪慣用表現が使用されても、そこに含意された話し手の心理が異なると考えられる。

さらに、この結果から明らかなことは、英語の謝罪慣用表現は話し手志向であるのに対し、日本語の謝罪慣用表現は聞き手志向であるという点である。英語の場合、話し手の責任、話し手の後悔の念に基づき謝罪が行われ、言い方を替えれば、聞き手の迷惑度や聞き手に対する気の毒さが高くとも、話し手に責任や後悔がなければ謝罪慣用表現は出にくいといえる。一方、日本語の場合、話し手に責任がなくとも、聞き手が迷惑をこうむれば謝罪慣用表現が使用されやすい。また、責任や迷惑度を超えて、聞き手の地位が謝罪慣用表現を誘発することもある。

謝罪慣用表現は、発話行為の一つとして考えられ、従来はその表現そのものの背後にある日・英語間の相違点にまでは目が向けられてこなかった。しかし、本研究では、話し手の心理的、対人的誘発要因を分析することで、両言語の謝罪慣用表現のこれら相違点を明らかにすることができた。

7. まとめと今後の課題

本調査では、話し手の心理と状況判断に焦点を当て、8 場面に限定して謝罪慣用表現が使用される際の要因を探った。しかし、実際には謝罪慣用表現はさらに多様な場面で使用されている。今回はとりあげなかったより慣用的な謝罪用法なども考慮にいれつつ、さらに多くの場面、多くの変数より調査する必要がある。また、謝罪慣用表現だけではなく、謝罪慣用表現に対する聞き手の返答を分析することで、謝罪表現そのものや謝罪談話の特徴をより広い視点よりとらえてゆくことがこれからの課題と考える。

<注>

1. Coulmas(1981)、Tanaka(2000)、大谷(2001)らの先行研究に基づき、謝罪に大きく関わる心理項目として抽出した。
2. 以下、「英語」はアメリカ英語を指す。
3. 謝罪は社会規範とかかわる問題であるため、十分に社会規範が確立されていると思われる被調査者を分析する必要があった。
4. 日・英語間で質問紙の内容統一を図るため、日本語の質問紙を英訳し、日本語の出来る英語話者にその英訳からの日本語訳を依頼し、その日本語訳とはじめの日本語の質問紙との間に内容のずれがないことを確認した。

<参考文献>

- Austin, J.L. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford: Oxford U.P. 坂本百大訳『言語と行為』大修館書店 1978.
- Coulmas, Florian. 1981. "“Poison to Your Soul” Thanks and Apologies Contrastively Viewed." *Conversational Routine: Explorations in Standardized Communication Situations and Prepatterned Speech*. Hague: Mouton.
- Kumagai, Tomoko. 1993. "Remedial Interactions as Face-Management: The Case of Japanese and Americans." 『松田徳一郎教授還暦記念論文集』東京: 研究社.
- Olshtain, Elite and Andrew D. Cohen. 1983. "Apology: A Speech-Act Set." *Sociolinguistics and Language Acquisition*. Rowley: Newbury House.
- Searle, John R. 1969. *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge U.P. 坂本百大・土屋俊訳『言語行為』勁草書房 1986.
- Tanaka, Noriko. 2000. "Would You Apologize When You Are Not Responsible?: Some Current Features in Younger Japanese." 『明海大学外国語学部論集』第12集.
- Trosborg, Anna. 1987. "Apology Strategies in Natives/Non-Natives." *Journal of Pragmatics* 11.
- 大谷麻美. 2001. 「謝罪表現の日・英語対照研究：談話における機能を中心に」『日本英語コミュニケーション学会紀要』第10巻 第1号.
- 中田智子. 1989. 「発話行為としての陳謝と感謝:日英比較」『日本語教育』第68号.
- 三宅和子. 1993. 「感謝の意味で使われる詫び表現の選択メカニズム: Coulmas(1981)の indebtedness 「借り」の概念からの社会言語学的展開」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第8号.
- . 1994. 「「詫び」以外で使われる詫び表現: その多用化の実態とウチ・ソト・ヨソの関係」『日本語教育』82号.
- 山梨正明. 1986. 『発話行為』東京: 大修館書店.

<Appendix> (談話完成テストおよび状況判断、心理的要因調査)

(日本語)

場面1: あなたが職場のデスクではさみを使っていたところ、はさみを誤って落してしまい、そばにいた上司の脚にあたってしまいました。上司の脚の甲にはうっすらと血がにじんでいます。

上司：「あっ、痛！」

あなた： _____

あなたの行為は上司に迷惑だかと思うか。 とても迷惑 5-4-3-2-1 全く迷惑でない
あなたは自分のしたことを残念に思うか。 とても残念 5-4-3-2-1 まったく残念でない
あなたは責任を感じるか。 とても感じる 5-4-3-2-1 全く感じない
あなたは上司に負い目を感じるか。 とても感じる 5-4-3-2-1 全く感じない
あなたは上司に対し気の毒に思うか。 とても気の毒 5-4-3-2-1 全く気の毒でない

(英語)

Situation 1: When you are using scissors at your desk in your office, you drop them by accident. They hit your colleague on the foot, who is standing beside you. His/her foot is slightly bleeding.

Colleague: "Ouch!"

YOU: _____

Is your action offensive to your colleague?

Very offensive 5-4-3-2-1 Not offensive at all

Do you regret your action?

Very regretful 5-4-3-2-1 Not regretful at all

Do you feel responsible?

Very responsible 5-4-3-2-1 Not responsible at all

Do you feel indebted to your colleague?

Very indebted 5-4-3-2-1 Not indebted at all

Do you feel sympathy for your colleague?

Very sympathetic 5-4-3-2-1 Not sympathetic at all